

母性看護学実習における二次医療施設と 一次医療施設の学びと教授活動

Learning and Teaching Activities between Secondary Medical Facilities and
Primary Medical Facilities in Maternity Nursing Practice

椎葉 美千代
Michiyo Shiiba

田出 美紀
Miki Taide

福澤 雪子
Yukiko Fukuzawa

新地 裕子
Yuko Shinchi

中西 真美子
Mamiko Nakanishi

高柴 雅代
Masayo Takashiba

母性看護学実習における二次医療施設と 一次医療施設の学びと教授活動

Learning and Teaching Activities between Secondary Medical Facilities and
Primary Medical Facilities in Maternity Nursing Practice

椎葉 美千代 *
Michiyo Shiiba

田出 美紀 *
Miki Taide

福澤 雪子 *
Yukiko Fukuzawa

新地 裕子 **
Yuko Shinchi

中西 真美子 *
Mamiko Nakanishi

高柴 雅代 ***
Masayo Takashiba

要 旨

少子化・産科医不足により、産科または産婦人科を標ぼうする病院・診療所が減少し、母性看護学実習を行う実習施設の確保は困難になってきている。看護師養成課程では母性看護学実習を大学病院・総合病院・診療所等さまざまな施設で行っており、複数施設を使用している学校も多い。そのため、施設の相違によって学生が実習で体験できる内容にも相違が生じることが推察される。本研究では、母性看護学実習の目標に対する学びの場面を二次医療施設と一次医療施設の周産期医療体制の違いをふまえて検討するために、看護大学3年次103名が、母性看護学実習終了時に記載した「母性看護学実習目標に対して学んだ場面」のレポートを、Text Mining Studioを用いて分析した。二次医療施設では分娩期の看護技術および妊娠期のモニター装着、母親学級の見学の経験が少なく、特徴的な学びの場面としてNICUが挙げられた。二次医療施設の教授活動については、NICUを活用する有効性が示唆された。一次医療施設では妊娠期、分娩期、産褥期、新生児期の全ての看護技術において経験率が高く、特徴的な学びの場面として助産師、分娩が示された。一次医療施設の教授活動については、妊娠期は外来診療および助産師外来への参加、分娩期は第1期からのケアの実施、産褥期は2週間健診や1か月健診に入れるように調整し、助産師と関わりながら、経験を通した学習ができる環境を整えていく必要性が示唆された。

キーワード：母性看護学実習、二次医療施設、一次医療施設、学び、教授活動

Abstract

As the number of hospitals and clinics specialized in obstetrics and/or gynecology decreases with the falling birth rate and lack of obstetricians, it is becoming difficult to ensure facilities for practical maternity nursing training. In maternity nursing courses, practical training is given in various facilities including academic hospitals, general hospitals, and medical offices, and many schools often use these multiple facilities for training. Therefore, students' training experience may differ from one facility to another. This study focused on fields of learning relevant to objectives in maternity nursing training in 103 third-grade students of a nursing college and analyzed their reports completed at the end of the practice by Text Mining Studio to characterize fields of learning for four practice facilities to reviews the fields of learning supporting maternity nursing training in view of differences in the perinatal care system between secondary and primary medical facilities. In secondary medical facilities, which are short of nursing skills in the intrapartum period and have less experience of monitor set-up, visit of maternity class in pregnancy, the fields of learning were characterized as NICU. Good use of NICU was suggested to be useful for teaching activities in secondary medical facilities. In primary medical facilities with high experience in nursing skills for pregnancy, delivery, puerperium, and neonates, the unique fields of learning ranged from midwife and delivery. The analysis also suggested that preparation of an experience-based learning environment was required, in collaboration with midwives, for teaching activities in primary medical facilities so that students could be involved in the outpatient examination and midwife's outpatient care during pregnancy, the practical care of the delivery period that starts from the first term, and the one or two-week health checkup of the puerperal period.

Key Words : practical maternity nursing training, secondary medical facilities, primary medical facilities, learning, teaching activity

* 福岡女学院看護大学 ** 九州医療センター附属福岡看護助産学校 *** 福岡女学院看護大学 非常勤職員

I. 緒言

本邦では少子化・産科医不足により、1990年から2011年の21年間に、産科または産婦人科を標ぼうする一般病院・診療所が、5,014施設減少している(厚生労働省,2012)。また、産科または産婦人科では、助産師および看護師養成課程の実習を受け入れるため、看護基礎教育において母性看護学実習の実習施設の確保は困難になってきている(日本医師会,2014)。

このような現状の中、看護師養成課程では母性看護学実習を大学病院・総合病院・診療所等さまざまな施設で行っており、複数施設を使用している学校も多い。産科では地域における施設の役割機能があり、周産期医療体制によって三次～一次医療施設に分かれており、施設によって受け入れる対象が異なるため、学生が実習で体験できる内容にも相違が生じることが推察される(宍戸ら,2011)。

しかし、看護学実習における授業は学生の体験で終了するわけではなく、学生が看護学実習で体験した現象を実習目標に則して経験に変えていく展開を行っている(杉森,舟島,2014)。そのため、学生は施設の相違があっても、その施設で体験した現象を学びの場面にして実習目標に則した学習をしている。

母性看護学実習における研究は技術経験状況に関する調査を多くみとめ(矢野,笠谷,2014; 笹木,小堀,2012; 成田ら,2007)、実習施設別(総合病院、中規模病院、クリニックなど)の技術経験状況は調査されている(木下,谷野,2010)。また、ハイリスク妊婦を受け持ちケースにした場合の学習への影響を検討した研究(藤原ら,2000)はあるが、実習施設の違いによる検討はされていない。

したがって、母性看護学の実習目標に対する学生の学びの場면을周産期医療体制の違いをふまえて検討することは、実習施設の違いを考慮した教授活動を考える際に役立つと考える。

II. 研究目的

母性看護学実習における学生の学びの場면을二次医療施設と一次医療施設で明らかにし、周産期

医療体制の違いをふまえた教授活動について示唆を得る。

III. 用語の操作的定義

二次医療施設：地域周産期母子医療センターを有し、ミドルリスクの対象を受け入れる施設とする。

一次医療施設：病院または診療所で、ローリスクの対象を受け入れる施設とする。

IV. 研究方法

1. 対象および方法

A 大学3年次109名に、母性看護学実習の6つの目標(表1)に対する学びを記載する際に一緒に書いてもらった「学びの場面」の記述(以下、母性看護学実習目標に対する学びの場面)を対象とした。母性看護学実習の6つの目標に対する学びは、A4用紙2枚に各目標に対して記載してもらっている。各目標の学びを記載する際に「学びの場面」を3～5行書けるように記載欄を設けた。このレポートの提出は実習最終日とした。

母性看護学実習は、2013年9月9日から2014年2月28日に、2単位90時間の授業を、産褥期の看護過程展開を4日間、機能別実習を4日間、学内学習を2日間で構築した。

A～D施設の4施設を使用し、A施設とB施設が二次医療施設、C施設とD施設が一次医療施設に該当する。学生の配置数は、二次医療施設66名(60.6%)、一次医療施設43名(39.4%)であった。1グループは、A施設が8～10名、他の3施設が4～5名で配置した。また、A施設は機能別実習でNICU実習を1日取り入れている(表2)。

表1 母性看護学実習目標

- | |
|--|
| 1. 母子関係や家族関係の形成について考察できる |
| 2. 母子および家族の支援のための地域との連携や社会資源の活用が分かる |
| 3. 母子保健医療チームのあり方と看護師の役割について述べることができる |
| 4. 援助的人間関係を築き、看護実践を通して人間関係を発展させることができる |
| 5. 自己の親性観(母性観・父性観)を述べることができる |
| 6. 人間としての尊厳と人権の擁護に配慮した行動をとることができる |

表2 母性看護学実習スケジュール (C 施設例)

	学生 a	学生 b	学生 c	学生 d	学生 e
第1週 月	オリエンテーション、受け持ち決定			外来診療	
火	看護過程の展開			助産師健診	
水	看護過程の展開			沐浴、分娩	
木	看護過程の展開			助産師外来、マタニティ教室	
金	学内学習				
第2週 月	外来診療			受け持ち決定	
火	助産師健診			看護過程の展開	
水	沐浴、分娩			看護過程の展開	
木	助産師外来、マタニティ教室			看護過程の展開	
金	学内学習				

2. 調査内容および分析方法

学生の実習体験を理解するために「受け持ち対象の分娩様式と母子同室の有無」「妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期の看護技術経験状況」を二次医療施設と一次医療施設で比較した。「受け持ち対象の分娩様式と母子同室の有無」については割合を比較し、「妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期の看護技術経験状況」については、Mann-Whitney の U 検定を用いて比較した。統計学的有意水準は5%とし、統計解析にはSPSS Statistics 21を使用した。

「母性看護学実習目標に対する学びの場面」は、6つの目標に対して、Text Mining Studio5.0を用い、二次医療施設と一次医療施設の単語頻度分析、特徴語抽出、ことばネットワーク分析を行った。単語頻度分析および特徴語抽出では、抽出する単語を名詞に設定した。単語の意味内容は原文に戻って解釈した。ことばネットワーク分析では、抽出する単語を名詞・形容詞・形容動詞・動詞とし、単語の出現回数を4回以上、特徴語が示されなかった場合は3回以上に設定した。

3. 倫理的配慮

対象学生に、研究の目的・方法・内容、自発的参加の保障、参加拒否や撤回の自由と不利益を被らないことの保障、個人情報およびプライバシーの保護に関する対策、情報管理に関する対策、研究結果の開示と学術的取扱いについて、口頭および文書による説明を行い、同意書および研究参加の中止の書類をいつでも提出できるよう期間を設けた。同意が得られた学生の実習レポートは符号表示を行い、個人が特定できないように留意した。本研究

は、福岡女学院看護大学研究倫理委員会の承認（審査 No.14 - 4）を受けて実施した。

V. 結果

1. 対象の内訳

研究の同意が得られた103名(94.5%)の母性看護学実習目標に対する学びの場面の記述を分析対象とした。施設別内訳は、二次医療施設64名(62.2%)、一次医療施設39名(37.8%)であった。学生が受け持った対象の分娩様式は、二次医療施設が経膈分娩38名(59.4%)、帝王切開26名(40.6%)、一次医療施設が経膈分娩36名(92.3%)、帝王切開3名(7.7%)であった。分娩時期は全員が正期産で、二次医療施設は母子同室の対象を受け持った学生が53名(82.8%)、母子分離が11名(17.2%)、一次医療施設は母子同室37名(94.8%)、母子分離2名(5.2%)であった。二次医療施設は帝王切開を受け持つ学生が約4割と高く、約2割の学生が母子分離の対象を受け持っていた。一次医療施設はほとんどの学生が経膈分娩、母子同室の対象を受け持っていた(表3)。

表3 受け持ち対象者の分娩様式と母子同室の有無
N = 103, 人数 (%)

	経膈分娩		帝王切開術	
	母子同室	母子分離	母子同室	母子分離
二次医療施設 (n=64)	32 (50.0)	6 (9.4)	21 (32.8)	5 (7.8)
一次医療施設 (n=39)	35 (89.7)	1 (2.6)	2 (5.1)	1 (2.6)

母子同室の有無は出生当日で表記

2. 看護技術経験状況

新生児期の看護技術は二次医療施設と一次医療施設の間に経験の差を認めなかった。産褥期は悪露交換の見学以外の項目に経験の差を認めなかった。二次医療施設は一次医療施設に比べて、妊娠期のモニター装着 (p<0.001) および母親学級見学 (p<0.001)、産褥期の悪露交換の見学 (p<0.001) の経験が少なく、

分娩期の看護技術についてはすべての項目 (p<0.01 ~ 0.001) において経験が少なかった。産褥期は悪露交換の見学以外の項目に経験の差を認めなかった。一次医療施設は二次医療施設より、全ての看護技術の経験率が高いまたは同等で、低い項目を認めなかった (図1)。

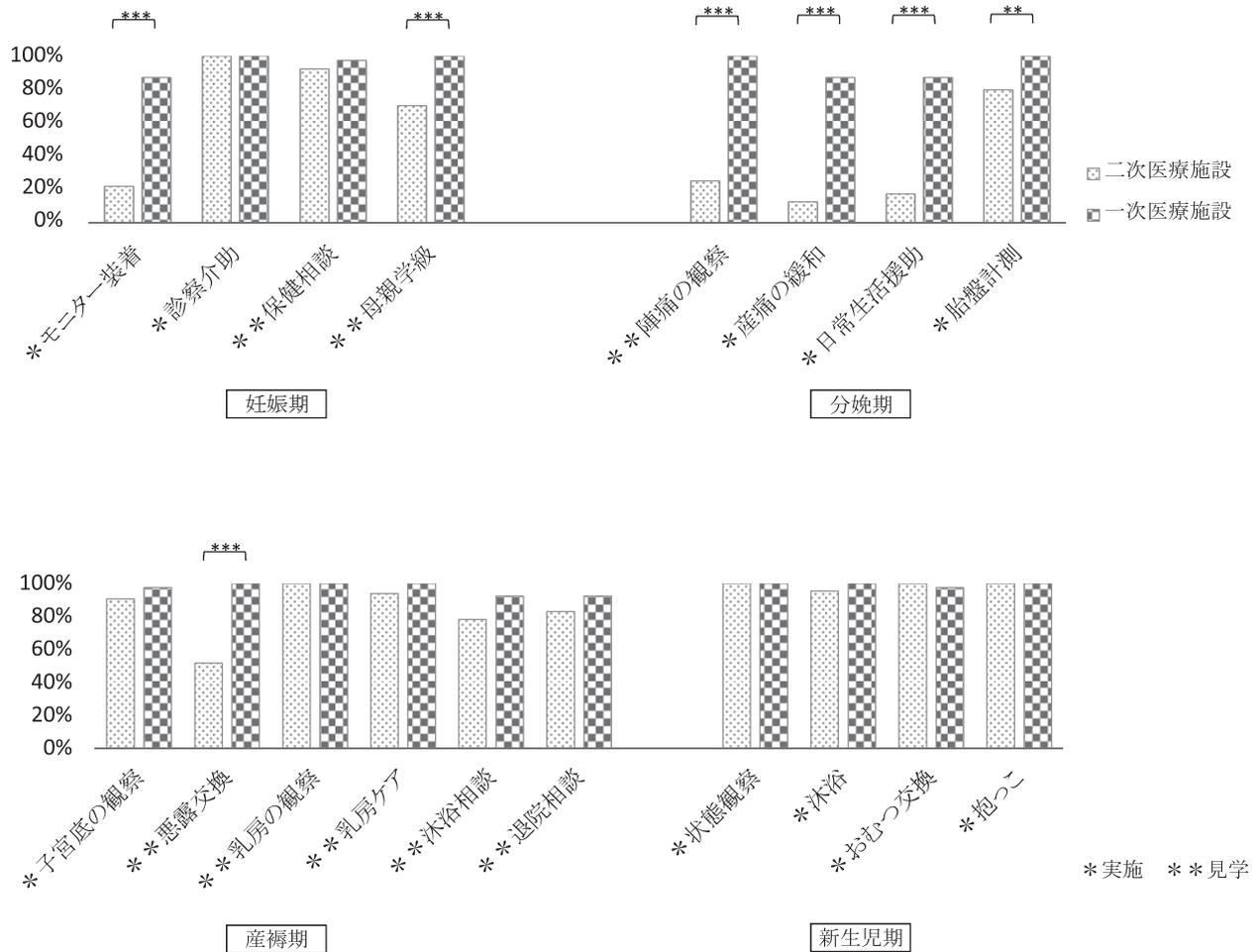


図1 二次医療施設と一次医療施設の看護技術経験状況 Mann-Whitney の U 検定 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

3. 母性看護学実習目標に対する学びの場面

学生は学びの場面として「児、母親」の単語を用い、使用頻度も多かった。二次医療施設・一次医療施設ともに、「児」の単語は6つの目標すべてに、「母親」の単語は5つの目標に使用されていた。二次医療施設で使用頻度が多かった単語は「NICU」で、5つの目標に用いていた。一次医療施設では「助産師、分娩」の使用頻度が多く、5つの目標に用いていた。

二次医療施設と一次医療施設を比較した結果、二次医療施設では、5つの目標の特徴語として「NICU」、3つの目標の特徴語として「児」、2つの目標の特徴語として「面会」が抽出された。他には「母子同室、退院、育児、保健相談、訪室、褥婦、沐浴、患者」が特徴語として抽出された。

特徴語をことばネットワークでみると、母子関係や家族関係の形成については「母子同室」で児と接する母親の姿を見た場面、「NICU」実習でカンガルーケアを見学した場面や児が「NICU」に入院している受け持ち対象が児と接する場面、夫や家族が児の「面会」に来た場面であった。母子および家族の支援のための地域との連携や社会資源の活用については「NICU」に入院している「児」の「退院」に向けた連携やサポートが学びの特徴として示された。その学びは「NICU」で指導者から「退院」に関する話を聞いた場面や母親から「退院」に関する話を聞いた場面から深められていた。母子保健医療チームのあり方と看護者の役割では「NICU」で行われている地域との連携について学んだ場面、助産師が行う「育児」に関する支援を見学した場面、外来で「保健相談」を見学した場面が学びの特徴として示され、援助的人間関係の構築と看護実践を通じた人間関係の発展では「児」への気持ちの変化を母親から聞いた場面、「児」の観察を通して母親とコミュニケーションを図った場面、母親の状態を考慮して「訪室」した場面、「褥婦」とコミュニケーションを図った場面または助産師が図っている場面が特徴として示された。自己の親性観に関しては「NICU」で児と接する母親や父親の姿、父親の「面会」、母親や父親が児の「沐浴」をする場面が学びの特徴として示され、人間としての尊厳と人権の擁護に配慮した行動に関しては「児」の誕

生の場面や「児」を一人の人間として接した場面、「NICU」でカンガルーケアや保育器で生きている児の姿をみた場面、「患者」の個人情報の取り扱いに留意した場面が二次医療施設の特徴的な学びの場面として示された。

一次医療施設では、3つの目標の特徴語として「助産師、分娩」が抽出された。他には「様子、退院指導、話、看護師、病院、一緒、陣痛、父親、姿、羞恥心、露出、バスタオル」が特徴語として抽出された。

特徴語をことばネットワークでみると、母子関係や家族関係の形成については「分娩」で児と接する母親や父親、家族の姿、児と接する母親の「様子」、「助産師」が児や母親と接する場面であった。母子および家族の支援のための地域との連携や社会資源の活用については「助産師」が行う外来で地域との連携について尋ねた場面、「退院指導」の見学や指導者から「退院指導」に関する説明を受けた場面、母親から退院後の生活について「話」を聞いた場面が学びの特徴として示された。母子保健医療チームのあり方と看護者の役割については「助産師」や「看護師」が多職種と連携をとる姿、救急搬送しなければならない事態に備えて他の「病院」と連携をとっている話を聞いた場面が学びの特徴として示され、援助的人間関係の構築と看護実践を通じた人間関係の発展では「分娩」第1期の看護場面で、母親と「一緒」に呼吸法や「陣痛」に対する産痛緩和を行った場面が特徴として示された。自己の親性観に関しては「父親」が母親や児と接する「姿」や児を抱く「姿」、「分娩」でみた母親や父親の「姿」が学びの特徴として示され、人間としての尊厳と人権の擁護に配慮した行動に関しては「羞恥心」の配慮や声かけが行われている場面、内診や乳房ケア、分娩で「露出」を最小限にするために「バスタオル」等を用いている場面が一次医療施設の特徴的な学びの場面として示された（表4-1、図2-1、表4-2、図2-2）。

表 4-1 実習目標に対する学びの場面の二次医療施設と一次医療施設の比較〔単語頻度分析 (上位 10 件)〕 N=103

	二次医療施設 (n=64)	一次医療施設 (n=39)
目標1. 母子関係や家族関係の形成について考察できる		
児	48	33
母親	30	22
父親	24	17
授乳	20	10
母子同室	17	—
NICU	16	—
面会	14	—
カンガルーケア	12	—
抱っこ	12	7
母子	11	—
分娩	—	12
様子	—	9
家族	—	8
姿	—	8
助産師	—	8
目標2. 母子および家族の支援のための地域との連携や社会資源の活用が分かる		
NICU	32	—
児	30	6
地域	23	12
退院後	22	11
退院	17	—
母親	17	12
保健師	15	—
説明	14	9
支援	13	—
健診	12	7
病院	12	7
助産師	—	9
退院指導	—	9
話	—	9
育児	—	6
不安	—	6
保健所	—	6
目標3. 母子保健医療チームのあり方と看護者の役割について述べる事ができる		
助産師	24	20
児	18	12
母親	16	9
外来	14	11
母子	12	—
NICU	10	—
育児	10	—
保健相談	10	—
医師	9	9
健診	9	—
連携	9	7
看護師	—	11
病院	—	10
情報共有	—	6
説明	—	6
分娩	—	6

単語頻度が上位10件でないものは一で示す
 二次医療施設および一次医療施設で特徴的な上位3つの単語〔特徴語抽出〕

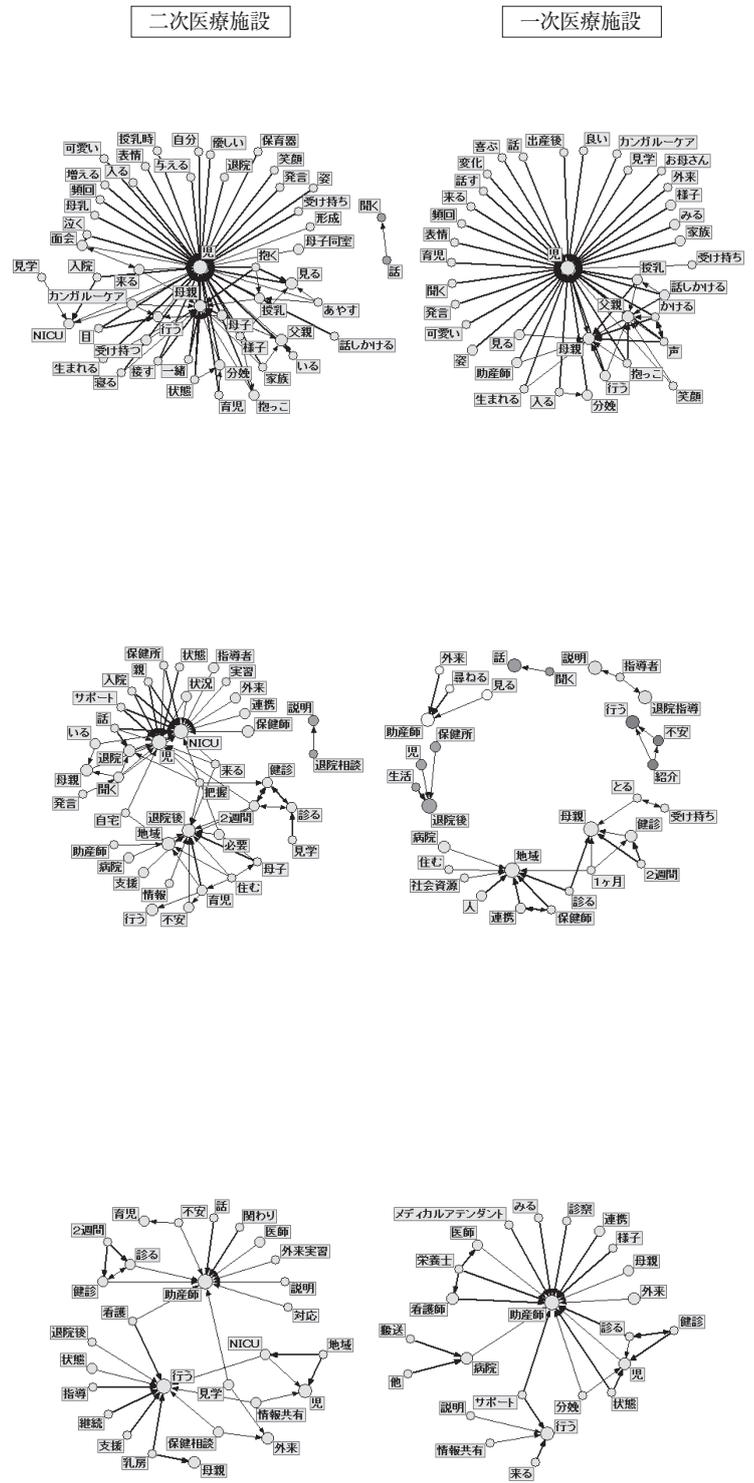


図 2-1 実習目標に対する学びの場面の二次医療施設と一次医療施設の比較〔ことばネットワーク分析〕

表 4-2 実習目標に対する学びの場面の二次医療施設と一次医療施設の比較〔単語頻度分析 (上位 10 件)〕N=103

	二次医療施設 (n=64)	一次医療施設 (n=39)
目標4. 援助的人間関係を築き、看護実践を通して人間関係を発展させることができる		
児	22	10
母親	19	12
コミュニケーション	14	7
助産師	14	14
不安	13	8
話	12	—
援助	11	9
授乳	11	—
訪室	11	—
分娩	8	13
褥婦	8	—
一緒	—	11
陣痛	—	7
声かけ	—	7
目標5. 自己の親性観(母性観・父性観)を述べることができる		
児	45	28
母親	27	19
父親	25	21
授乳	15	6
様子	14	7
発言	13	—
分娩	12	20
NICU	11	—
面会	11	—
沐浴	9	—
笑顔	9	—
姿	—	14
抱っこ	—	6
一緒	—	5
自分	—	5
手	—	5
助産師	—	5
目標6. 人間としての尊厳と人権の擁護に配慮した行動をとることができる		
児	25	14
外来	15	12
NICU	14	—
診察	13	8
カーテン	12	10
内診台	12	9
羞恥心	11	16
プライバシー	10	—
母親	10	—
患者	9	—
配慮	9	13
露出	9	14
バスタオル	—	9
内診	—	8
分娩	—	8

単語頻度が上位10件でないものは一で示す

■ 二次医療施設および一次医療施設で特徴的な上位3つの単語〔特徴語抽出〕

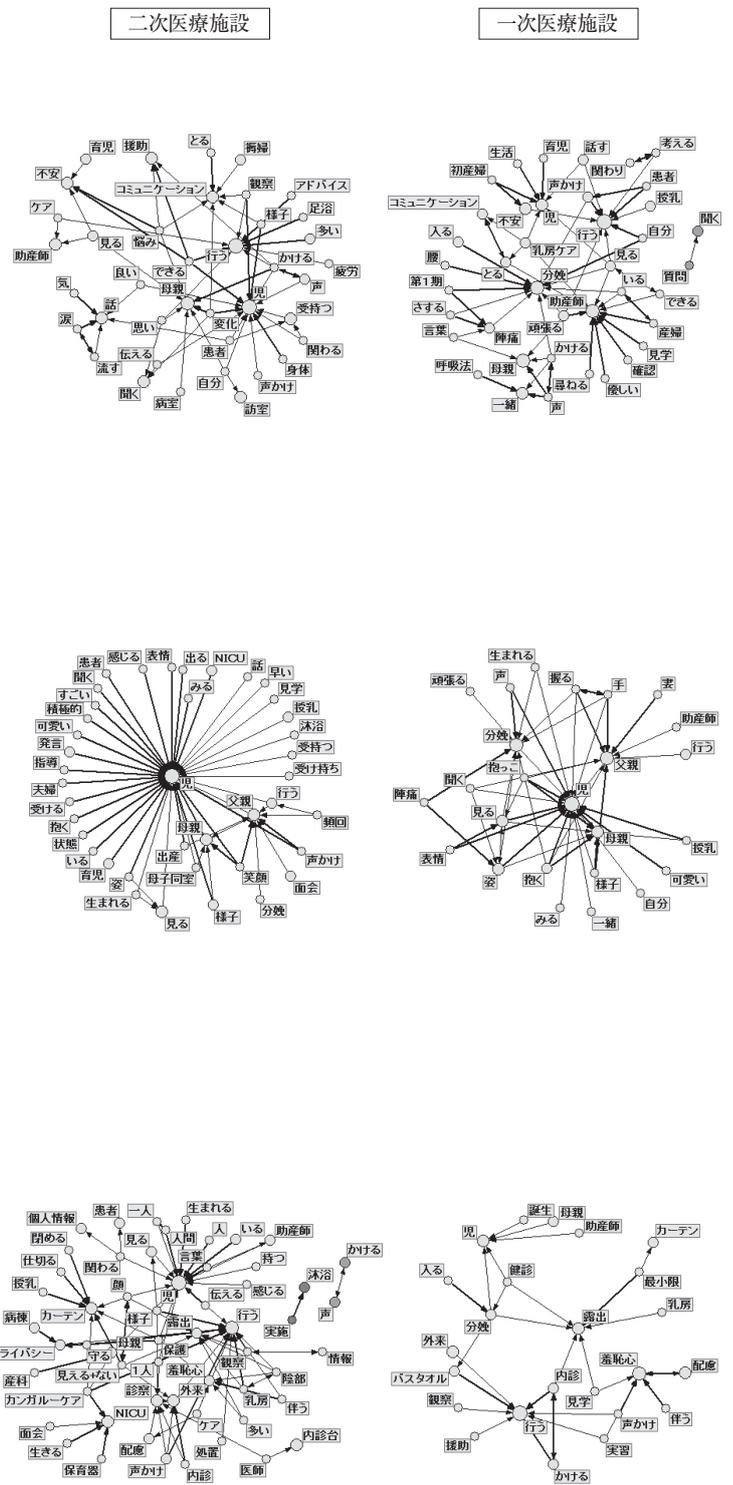


図 2-2 実習目標に対する学びの場面の二次医療施設と一次医療施設の比較〔ことばネットワーク分析〕

VI. 考察

1. 二次医療施設と一次医療施設の実習経験の違いをふまえた教授活動

二次医療施設は一次医療施設に比べ、帝王切開を受け持つ学生の割合が高く、分娩期の看護技術の経験が少なかった。分娩見学の効果として、妊娠経過と産褥経過を結びつけることができ(志賀, 伊藤, 2000)、学生の75%は分娩進行状態の理解が出来ていたことが報告されている(佐藤, 2009)。分娩期の看護の経験が少ない二次医療施設では、産褥期の看護過程の展開を妊娠期や分娩期と結びつけて理解することが困難になることや分娩進行状態を理解せずに実習を終えることが推察される。教授活動として、視聴覚教材の活用やカンファレンスの共有が有効であることが報告されている(佐藤, 2009)。二次医療施設の実習では、経膈分娩の視聴覚教材を用いた学習会や分娩期の看護の経験を共有するカンファレンス、分娩期の事例検討会等を設定する工夫が必要である。逆に、一次医療施設の実習では、帝王切開術の事例検討会等を設定する必要がある。

また、二次医療施設は一次医療施設に比べ、妊娠期のモニター装着や母親学級の見学の経験が少なかった。二次医療施設はミドルリスクの妊婦を受け入れる施設であるため、切迫早産等のリスクを伴う妊婦が多く、腹部触診を伴う看護技術の実施は困難であることが推察される。二次医療施設で実習を行う学校は、学内演習でモニター装着や判読の授業を組み入れていく工夫が必要である。母親学級の学習効果は、母性看護学に特徴的な健康相談や保健指導という助産師の専門的な働きに触れ、看護者としての役割機能を考えることができるとされている(中島ら, 2003)。二次医療施設では一次医療施設より母親学級の見学の経験が少ないが、外来で助産師の保健相談を見学した場面から母子保健医療チームのあり方と看護者の役割を考えるとできる特徴が示された。集団指導に参加する機会が少ない二次医療施設では、個別指導に参加する機会を設け、看護者の役割機能について考えることができるように導いていく必要がある。

二次医療施設は、約2割の学生が母子分離の対

象を受け持っていた。しかし、新生児期の看護技術については、施設別技術経験の差を認めなかった。教員は母子分離をしている母親を受け持った場合でも、他の児で新生児期の看護技術を体験できるように調整していることが推察された。二次医療施設における母子関係や家族関係の形成に関する学びは、NICUで児に接する受け持ち対象の姿を通して深めることができている。母子分離をしている母親を受け持った学生に対して教員は、受け持ち以外の児で新生児期の看護技術を体験できるようにすることやNICUで受け持ち対象が児と接する場面に学生が同席できるように調整することが必要である。

一次医療施設は妊娠期、分娩期、産褥期、新生児期の全ての看護技術において経験率が高かった。

2. 二次医療施設と一次医療施設の学びの場面の違いをふまえた教授活動

二次医療施設で使用頻度が多かった単語は「NICU」であり、5つの目標の学びの場面として抽出された。二次医療施設では、分娩期の看護の経験が少なく、分娩時に実施される早期母子接触を見学できる機会が少ないことが推察される。しかし、NICUでカンガルーケアや保育器の児の姿を見学することによって〔母子関係や家族関係の形成〕および〔人間としての尊厳と人権の擁護に配慮した行動〕に関する学びの場面になっていた。NICUに入院している児の退院に向けた連携やサポートを理解することによって〔母子および家族の支援のための地域との連携や社会資源の活用〕および〔母子保健医療チームのあり方と看護者の役割〕といった包括的なサポートについて理解を深める機会になっていた。さらに、NICUで児と接する母親や父親の姿をみることによって〔自己の親性観〕を考えることができていた。NICU実習は「母子関係確立と家族形成を支援する看護を学習」「児と家族を支える包括的なサポートを理解」「個々の児の人格を尊重した愛情ある看護を実感」する機会になることが述べられており(白坂, 山地, 桑田, 2012)、母性看護学実習の実習目標に相応する学びができると考えられる。二次医療施設は地域周産期母子医療センターでNICUを有しているため、NICU実習を組み入れることは可能である。NICU実習では、カンガルー

ケアの見学や保育器で懸命に成長発達している児の姿、退院に向けた連携やサポートの理解、児と接する母親や父親に付き添うことができるように調整することが教授活動として必要である。

また、二次医療施設の特徴語として、「母子同室」で児と接する母親の姿を見た場面、夫や家族の「面会」の場面、母親から「退院」や「児」への気持ちを聞いた場面、「褥婦」とコミュニケーションを図った場面等が示されていた。分娩期の看護の経験が少ない二次医療施設では、母親や父親が児と接する場面に付き添えるように調整することが教授活動として必要である。

一次医療施設で使用頻度が多かった単語は「助産師、分娩」であり、5つの目標の学びの場面として抽出された。一次医療施設の特徴語としても「助産師、分娩」が3つの目標に示された。助産師が児や母親と接する場面を見学することによって〔母子関係や家族関係の形成〕の学びの場面になっており、助産師から地域連携や退院指導の説明を受けることによって〔母子および家族の支援のための地域との連携や社会資源の活用〕について学んでいた。また、助産師が多職種と連携している場面や助産師から医療連携について説明を受けた場面から〔母子保健医療チームのあり方と看護者の役割〕を学んでいた。ローリスク妊婦を対象とする一次医療施設では、正常経過を辿る妊娠・分娩・産褥の対象であれば、助産師が判断してケアを行うことができる。そのため、学生は助産師が行う保健相談やケアに参加する機会が多くなる。助産師が行う妊婦健診や保健相談、退院後2週間健診に参加できるように調整する教授活動が必要である。

分娩では児と接する母親や父親、家族の姿が〔母子関係や家族関係の形成〕の学びの場面になっており、分娩第1期のケアに参加したことが〔援助的人間関係の構築と看護実践を通じた人間関係の発展〕の学びになっていた。また、分娩でみた母親や父親の姿が〔自己の親性観〕の学びになっていた。分娩見学が可能な一次医療施設では、呼吸法や産痛緩和を行う第1期から分娩に入れるように調整する教授活動が必要である。

一次医療施設は二次医療施設と違い、看護技術の経験率も高いため、外来の診察や分娩等多くの

経験ができるように調整することが学生の学びに有効である。一次医療施設では、妊娠-分娩-産褥期と継続した学習を行うことができる。妊娠期は外来診療および助産師外来への参加、分娩期は分娩見学だけでなく、分娩第1期からのケアの実施、産褥期は入院中だけでなく、2週間健診や1か月健診に入れるように調整し、助産師と関わりながら、経験を通じた学習ができるように環境を整えていく必要性が示唆された。

本研究の限界と今後の課題

本研究では三次医療施設（総合周産期母子医療センター）の実習の学びについては調査できていない。また、二次医療施設と一次医療施設は各2施設であり、1施設あたりの対象者数も少なく、一般化するには限界がある。分析方法としてText Mining Studioを用いたが、行間のことばが示されず、文脈がとらえにくいという特性がある。原文に戻りデータの見直しを行いながら分析したが、客観性の確保には限界がある。また今回は、学生の学びの場面に関連した学習内容の検討までは至っていない。今後の課題として、学びの場面と学習内容を関連させた分析を行い、学習成果をふまえた教授活動を考えていく必要がある。

VII. 結語

1. 二次医療施設は分娩期の看護技術および妊娠期のモニター装着、母親学級の見学の経験率が低く、一次医療施設は全ての看護技術において経験率が高かった。

2. 母性看護学実習目標に対する学びの場面のレポート記述で、二次医療施設は「NICU」、一次医療施設は「助産師、分娩」の単語の使用頻度が多く、特徴語として示された。

3. 二次医療施設ではNICUを活用する有効性が示唆された。NICU実習ではカンガルーケアの見学、保育器内の児の理解、退院に向けた連携やサポートの理解ができるように調整し、母子同室・分離に関わらず母親や父親が児と接する場面に学生が付き添えるようにする教授活動が必要である。

4. 一次医療施設では妊娠期は外来診療および助産師外来への参加、分娩期は第1期からのケアの実施、産褥期は2週間健診や1か月健診に入れるように調整し、助産師と関わりながら、経験を通し

た学習ができる環境を整えていく教授活動が必要である。

【文献】

- 1) 木下照子, 谷野宏美.(2010). 母性看護学実習の施設別にみた学生の母性看護技術経験の検討. 新見公立大学紀要, 31,125-131.
- 2) 厚生労働省. 医療施設(動態)調査・病院報告の概況. 2014-09-06
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/sai kin/hw/iryosd/12/dl/1-1.pdf>
- 3) 笹木葉子, 小堀ゆかり.(2012). 母性看護学実習における学生の技術経験状況調査. 北海道文教大学研究紀要, 36,81-91.
- 4) 佐藤美奈子.(2009). 分娩見学実習における看護学生の学びと実習指導についての文献検討. 三育学院大学紀要, 1(1),35-42.
- 5) 志賀くに子, 伊藤榮子.(2000). 母性看護学実習における学習効果の検討 - 分娩見学レポートの分析 -. 日本赤十字秋田短期大学紀要, 5,79-87.
- 6) 宍戸路佳, 大森智美, 久保恭子他.(2011). 看護師養成課程における母性看護学実習の実態. 埼玉医科大学看護学科紀要, 5(1),47-53.
- 7) 白坂真紀, 山地亜希, 桑田弘美.(2012). NICU/GCU 実習における看護学生の学び - 小児看護学実習記録の分析から -. 滋賀医科大学看護学ジャーナル, 10(1),22-27.
- 8) 杉森みど里, 舟島なをみ.(2014). 看護教育学第5版増補版. 251-258, 医学書院, 東京.
- 9) 中島久美子, 土江田奈留美, 國清恭子他.(2003). 母性看護学実習体験から見た学習効果の分析. 群馬保健学紀要, 24,31-42.
- 10) 成田恵美子, 渡邊竹美, 糠塚亜紀子他.(2007). 母性看護学実習における学生の看護技術経験の認識に関する調査. 秋田大学医学部保健学科紀要, 15(1),58-67.
- 11) 日本医師会. 「看護師等養成所における実習に関する調査」結果について. 2014-09-06
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf>
- 12) 藤原聡子, 河村敬子, 茅島江子.(2000). 母性看護学実習における学習効果についての比較検討 - ハイリスク妊婦を受け持ちケースにして -. 国際医療福祉大学紀要, 5,31-35.
- 13) 矢野貴美子, 笠谷ひとみ.(2014). 母性看護学実習における卒業時の看護技術到達度の実際. 日本看護学会論文集 看護教育, 44,126-129.